

『サラディンの稀有で至高の書』——その3——

バハー・アッディーン・イブン・シャッタード
松田俊道 訳

サラディンの寛容さと情け深さに関する記述⁽¹⁾

全能の神は言われた。「それはすすんで赦してやる人達のこと。アッラーは善をなす人々を好み給う。」⁽²⁾サラディンは耐え、許していた。怒りは稀有であった。かつて私（イブン・シャッタード）は十字軍がアッカー・アッラーがその征服を容易になされますように——に進軍する前に、マルジュ・ウユーン Marj Uyun⁽³⁾において彼と共に軍務にあつた。それは彼の習慣であつたが、いつもの時間に乗馬をしていた。馬から降りると、食事が出され、お付の者たちと食べていた。それから、自らの天幕に入り眠るのが常であつた。眠りから覚めると、礼拝をし、座してくつろいでいた。私は彼の傍らにいた。その時、われわれはハディースの小品とフィクフの小品を読んでいて、彼は私のためにス

レイマーン・アッラーズイー⁽⁴⁾のイスラーム法学の四法源を含んだ要約集を読んできた。

ある日、彼はいつものように戻ってきた。彼の前に食べ物を用意された。彼が食事を始めようとしたとき、「礼拝の時刻が近づいてきた」と告げられた。すると彼は着座して、「われらは礼拝をしよう。それから眠ろう」と言った。その後、彼は当直者以外を立ち去らせて、疲れてはいたが、座して（問題に関する）話し合いを始めた。しばらくすると、サラディンに尊敬されている一人の老齢で高位のマムルークが近づいてきて、一人の戦士のために彼に嘆願書を差し出した。すると彼は言った。「私は今疲れているのでしばらく待つてくれないか」と。

しかし、彼は気づかうことなく嘆願書を高貴なサラディンの顔のそばに突き出した。そしてそれを読むために広げた。彼は嘆願書の冒頭に記された名前に目を落とした。彼はそれを認識した。彼は言った。「権利のある男だ」と。そのマムルークは言った。「それに署名を願いたい」。サラディンは、「私の手元には今、筆記用具（インク壺）がないのだ」と言った。

サラディン―彼にアッラーのご加護あれ―は天幕⁽⁵⁾の入口に座っていたので、誰もその中に入ることが出来なかった。筆記用具は大きな天幕の壁のそばにあった。そのマムルークは、この筆記用具が天幕の壁のそばにあることをサラディンに告げた。このことは、彼以外には筆記用具を持つてくることが出来ないことを意味していた。サラディンは振り返り―彼にアッラーのご加護を―、筆記用具を見た。彼は言った。「神かけて彼は正しかった」と。彼は左手を寄りかからせながら、右手を伸ばしてそれを持ってきた。それに署名をした。そこで私は言った。「神は彼の預言者の徳性について言った、『汝はまことに立派な生まれつき』⁽⁶⁾と。私は、わが主が預言者との生来の徳性について同じものを共有していると思った。彼は言った。「それは語るほどのことではない。われらは必要なことを行っただけだ。それで十分報われる。」

もし誰かそしてある個人にこのような出来事が起こるならば、サラディンを憂慮に陥れたであろう。彼の配下の者で誰か他にこのように答えることが出来る人がいるであろうか。これは思いやりや忍耐の究極である。『アッラーは、功労者の御褒美は絶対にお忘れになりはせぬ。』⁽⁷⁾

彼のクツションは、人々が嘆願書を彼に届けるために混雑し、踏み付けられていた。しかし彼は、そのことに何ら影響を受けなかった。

ある日、私がサラディンに伴つてラバに乗っている途中、私のラバが、ラクダの群れに驚いて逃げ出した。するとラバはサラディンが痛みを感じるほど彼の腿に突進してしまった。それでも彼は微笑んでいた――彼にアッラーのご加護が――。

ある風と雨の日に、私がサラディンを先導してイエルサレムに向かう途中、彼は泥にまみれていた。私のラバが彼に泥を跳ね飛ばしていたのだ。そのため彼が身に付けていたものをすべて台無しにしてしまった。それでも彼は微笑んでいた。このために私は彼の後ろに後退することを望んだが、彼はそうせなかつた。

サラディンは、彼に助けを求める者たち、彼に不満を漏らす者たちからの最も厳しい言葉でさえも聞くことが出来、また喜びをもつて受け入れることが出来た。これはそのようなことが記録されることは稀であるという話である。

フランク―神が彼らを見放しますように――の王の兄弟がヤッファに向かつていた。というのは、われらの軍が彼ら避けてナトルーンに退却していたからであつた。ナトルーンとヤッファとの間は、強行する軍隊では二日間の行程であり、通常では三日間の行程であつた。サラディン―彼にアッラーのご加護あれ――は彼の軍隊を集結し、彼らに打ち勝つことを目論んで援軍に合流するためにカイサーリーヤに向かつてた。ヤッファにいたフランクたちはこのことを知つた。そこには大軍を率いたイギリス王がいた。彼は彼のもとにいたほとんどの軍隊を乗船させカイサーリーヤに派遣した。援軍が良からぬ事を彼らにもたすことを恐れていたからである。王はわずかな軍隊とともにそこに残つていた。というのは、彼らは、サラディン―彼にアッラーのお恵みあれ――と彼の軍隊から遠くにいたからである。

サラディン―彼にアッラーのお恵みあれ――がカイサーリーヤに到着したとき、彼はフランクの援軍がすでに町に到着し、保護されていることを知つた。サラディンは彼が計画していたものを成し遂げることが出来ないのではないかと思つた。そのため、彼はその夜のうちに行軍し、朝にはヤッファに到着した。イギリス王は一七人の騎士と三〇〇人の歩兵を率いて町の外の彼の天幕にいた。その軍隊も朝を迎えた。すると一人の呪われた男が乗馬した。彼は勇敢

で戦争を良く知っていた。彼は軍隊の先頭に立ち、町に入らなかつた。ムスリムの軍隊は、町の方向を除いて彼らを包囲し、戦鬪の準備をした。サラディンは軍隊に機を逃さず攻撃を命じた。すると何人かのクルド人のアミールたちが荒い言葉で彼に答えた。彼の収入が問題となっていた。イクターの配分の低さのためであつた。するとサラディンは、まるで怒つた男のように馬の手綱を引いた。というのも、サラディンは、彼らがその日は何もしないであらうということを知っていたからである。彼は彼らを残し、立ち去つてしまつた。彼は張られていた彼の天幕の解体を命じた。軍隊は、サラディンがその日軍団の何人かを磔にし、殺害することを確信して敵から立ち去つたのだ。

かつてサラディンの息子ザーヒル王―アッラーが彼に従う者たちを強固にしますように―が、私（イブン・シャッダード）に語るには、その日ザーヒルはサラディンを恐れていたので、父に制止されるまで敵に深く突撃していたにもかかわらず、サラディンの視界に入らないようにした。サラディンは行軍を続け、わずかな行程のヤーズールで止まつた。そこに彼のために小さな天幕が張られ、そこに宿営した。軍隊は、このような場合に通常使用する小さな避難所〔8〕に宿営した。アミールたちの中で恐怖により震えていない者は一人もいなかった。彼らはサラディンにより逮捕され叱責されると思つていた。ザーヒルは言つた。「彼への恐怖が、彼が私を呼ぶまで、私が彼のもとに入る勇氣を起こさせなかつた。彼のもとに入つたのは、ダマスクスから大量の果物が彼のもとに届けられた後のことであつた」と。するとサラディンは言つた。「アミールたちを呼んでくれ給え。彼らにも味わつてもらおう」と。

ザーヒルは言つた。「すると私の恐怖が私から去り、私は、アミールたちを探した。彼らは恐怖を抱いたまま現れた。彼らはサラディンの喜びを見出すと、彼らがサラディンのもとを辞するとき、もともと何もなかつたかのように、強い進軍の意志をもつてサラディンのもとを去つていった」と。

この忍耐に思いを巡らしてみると、このような時代には起こらなかつたことであり、このような事例をもたらしした王たちを語ることが出来ない。彼にアッラーのお恵みを。

彼の騎士道精神遵守の記述

アッラーが彼の精神を称揚されますように

預言者―彼にアッラーの平安あれ―は言った。「私は高潔さの特質を完全無欠にするために遣わされた」(9)と。

もし誰かが預言者―彼にアッラーの平安あれ―に彼の手を差し出したとき、その男が先に手を放すまで彼は彼の手を引かないであろう。真にサラディンは騎士道精神に満ち溢れ、寛大で、謙虚であり、彼のもとを訪れる客に対して優しい顔を見せた。彼は、客が食事を取るまで彼のもとを辞することを許さなかった。また、彼が事を成し遂げるまで彼に何かを述べることを許さなかった。

彼は来る者を、たとえ異教徒といえども丁重に受け入れた。たとえば、五八八年シャツワール月(一一九二年一〇月)に和約が成立した後で、アンティオキアの王がサラディンのもとを訪ねてきた。サラディンは、彼の天幕の扉のところにこの王が立っていることにより、気が付いた。それはサラディンがイエルサレムからダマスクスに向かう途中、彼が現れたときのことであつた。この王は彼に何かを求めた。するとサラディンは、アムク(10)を彼に与えた。そこは、かつてサラディンが海岸地域を征服した五八四年(一一八八年)に彼から獲得したものであつた。

また、私(イブン・シャッダード)がナザレにいたときのこと、サイダ Sidon の王がサラディンを訪問するのを見た。彼は王に敬意を表し、名譽をもつて彼をもてなし、食事を共にした。そればかりか、王にイスラームを受け入れるよう提案した。彼は王にその美しさの極みを語り、それを受け入れるように急き立てた。

同様に、サラディンはシャイフや学者、文人たち、名声を得ている人たちの中で彼のもとを訪ねる人々に対して敬意をもつて受け入れた。彼がわれわれに申し付けていたことは、著名なシャイフたちで天幕を通り過ぎる者たちがいたら、われわれが彼らをサラディンのもとに連れていき、彼らを軽んじないようにすることであつた。それは彼の寛大さを彼らに与えることが出来るようにであつた。

五八四年（一一八八―八九年）のこと、宗教学とスーフィズムを結合した男がわれわれを訪ねてきた。彼は名声を得ていて、彼の父はタブリーズの支配者であった。彼は父の職位への就任を断り、学問とその実践に専念し、巡礼を行い、イエルサレム訪問のために到着した。彼は、そこでのサラディンの事業に驚嘆し、彼の尽力の跡を見て、彼はサラディンの訪問を思いついた。その後、彼は軍営にあるわれわれのもとに至った。

私が彼に気づいたのは、彼が私の天幕の中に入ってきたときであった。私は彼を迎え、歓迎した。私は彼に訪問の理由を尋ねた。すると彼は、私に以下のように答えた。彼は、サラディンの並々ならぬ、賞賛すべき事業を見たときにサラディンの訪問を思いついた、と。私はその夜スルターン（サラディン）―彼にアッラーのお恵みあれ―にこの男の到着を知らせた。彼はこの男を呼び寄せた。スルターンはこの男からあるハデイスを聞いた。彼はイスラームのおかげでこの男に感謝し、彼を善行へと駆り立てた。それからわれわれは彼のもとを辞し、私の天幕で夜を過ごした。われわれが夜明けの礼拝と一緒にすると、彼は私に別れの挨拶を始めた。そこで私は、スルターンに別れの挨拶をしないで去っていく彼をとがめた。しかし、彼は注意を払わず、そのことを気にすることもなかった。彼は言った。「私は私の望みを成し遂げた。私には彼に会うこと、彼を訪ねること以外には目的はありません」と。そして彼は直ぐに去って行った。数日後、スルターンはその男のことについて尋ねたので、私は起こったことを彼に話した。すると私がその男の出發をスルターンに知らせなかったので、彼に苛立ちの様子を表れた。彼は言った。「どうしてこのような男がわれわれのところを訪ねてきて、われわれの寛大さに触れずに立ち去ってしまうのか」と。

そのことに関して、彼の私への非難は強かった。私はダマスクスのカーディーのムヒー・アッディーン⁽¹⁾に書簡を書くことは避けられないと思った。その中で私はその男の状況を探ることを彼に依頼した。書簡には、私が書いたことを伏せた私の覚書を付けた。私は彼に、スルターンは彼に会うことなしに去って行かれたことに不満を抱いている旨をその男に伝えた。私は彼に戻ってくることが望ましいと伝えた。私と彼との間にも同様の友情が必要であったので。するとそのとき、彼が私のところに戻ったばかりであることに私は気づいた。そこで私はスルターンにメモを書き、彼にそのことを知らせた。するとスルターンは、「その男と一緒に連れてきてくれるように」という返書を書

き送つてきた。私はそのようにした。スルターンは彼を歓迎し、大いに喜んだ。というのも彼はその男に会いたかつたのだ。彼は数日間その男を引き留め、上等の名譽の服を与えた。さらに程良い乗り物、彼の家族に、彼の従者に、彼の隣人のために多くの服を彼に与えた。また旅の途中で利用できるお金を与えた。サラディンのもとを去るときには、その男は皆に最大限の感謝を表し、彼の治世に対する祈願を献じた。

かつて私は、サラディンの前に恐れかしこまっている一人のフランクの捕虜が連れ出されたのを見た。恐怖と不安の状態が彼には表れていた。通訳が彼に言った。「お前は何を恐れているのか」。神は彼の舌に言わせた。「私は彼の顔を見る前は恐れていた。ところが彼の前にいて彼を見た後では、私は、彼は良い取り扱い以外はしないであろうと確信した。アッラーの哀れみが彼にあれ。サラディンは彼を許し、彼を解放した。

ある日、私はフランクと対戦するためにサラディンに従つて馬上にいた。斥候¹²の一人が、深く悲しみ、慟哭し、胸を打ち続ける女を伴つて現れた。その斥候兵は言った。「この女はフランクの中から現れ、あなたのもとに連れていつてくれと頼んだので彼女をここに連れてきました」と。すると彼は通訳に、彼女の事情を彼女に尋ねるように命じた。彼女は言った。「ムスリムの盗人たちが昨日私の天幕に入り、私の娘を連れ去っていきました。私は昨夜から次の日の昼まで助けを求め続けました。また、私は言われました。『あちらの王は寛大だ。お前が、娘を彼に求められるように、お前が彼のもとに出ていくことを許そう』と。それゆえ、彼らは私をあなたのもとに行かせました。あなた以外には私の娘を突き止められないでしょう」と。

サラディンは彼女に哀れみをかけた。彼の眼から涙が流れ、彼の寛大さが彼を動かした。彼は誰か人を軍の市場に遣わし、その少女を探すことを命じた。その少女を買った者にはその値の額が支払われ、少女は連れ戻された。サラディンが彼女のことを知ったのはその日の朝早くのことであつた。そして一時間も経たないうちに一人の騎士が肩に彼女を担いで戻つてきた。母の眼がその騎士を捉えるや否や、彼女は崩れ落ち、その顔は泥でまみれた。彼女を取り巻いていた人々は、彼女の身に起こったことに涙した。彼女は眼を空に向かって上げ、われわれの知らない言葉をつぶやいた。娘は彼女に戻された。それから彼女は引き返し彼らの軍営に戻つていった。

サラディン―彼にアッラーのお恵みあれ―は、もし背信が行われたとしても彼に従う者への虐待を正しいとは考えていなかった。かつて彼の金庫の中にあつた二つの鞆の中のエジプト金貨が銅貨に変えられていたことがあつた。そのときサラディンは、その部署の担当者たちには、彼らの職務を解いた他は何もしなかった。

サラディンのもとにケラクの支配者であるアルナート王 Anūt (Reynald)⁽¹³⁾ が海岸地域の王を伴つて現れた。彼ら二人は五八三年（一一八八年）のヒッティーン⁽¹⁴⁾の戦いで捕虜となつていた。この戦いは有名なので―アッラーがお望みならば―その場所のところで語られるであろう。サラディンは両者に彼の面前に出頭するように命じていた。この忌まわしいアルナートは途方もない異教徒で、恐ろしい圧政者であつた。かつてエジプトからの隊商―アッラーの警護あれ―がその土地を通過していた。その際にはムスリムたちと彼らの間でフドナ（休戦条約）が結ばれていた。彼は隊商に裏切り行為を行い、それを捕縛した。彼は、隊商を行つていた人たちを手荒く扱い、彼らを苦しめた。彼は、彼らを穀物用の穴蔵、狭い小部屋の牢に閉じ込めた。彼らが彼に休戦条約があることを申し立てると、彼は言つた。「お前たちのムハンマドにお前たちを解放するように言つたらどうだ」と。

サラディン―彼にアッラーのお恵みあれ―にそのことが伝えられたとき、もしアッラーが彼をその力の中に置いたならば、彼はその異教徒を自ら殺害することであらうと誓つた。その日に、アッラーが彼にそのことを可能にしたとき、彼は誓いを充足して直ちに彼の殺害を決心した。サラディンは彼を王と共に召し出した。王は渴きを訴えた。するとサラディンは彼に一杯のシャーベットの杯を与えた、王はそのうちのいくばくかを飲んだ。それから、王はその杯をアルナートに手渡した。するとサラディンは通訳に言つた。

「王に言つてくれ。飲み物を与えられるのはお前だけだ。私はその男には飲み物はおろか食べ物さえやらないぞ」⁽¹⁴⁾と。

サラディン―アッラーのお恵みが彼にあれ―の意図するところは、「もしも誰かが私の食べ物を食べたならば、騎士道精神が私にその男を害さないことを求めるようになってしまふ」ということであつた。それから、彼の誓いを充足し、サラディンは自らの手でその男の首を刎ねた。

サラディンがアッカを占領したとき、彼はすべての捕虜を狭い監禁状態から解放した。その数は四千人であった。彼は、そのすべての人に彼らが住んでいた町に帰還し、その家族のもとに到着できる旅費を支払った。私は多くの人々からこのように聞いています。というは、私はこの遠征に参加していなかったからです。

サラディンは、社交的で礼儀正しく、滑稽さを持ち合わせていた。彼は昔のアラブの血統と彼らの戦いに熟知し、彼らの歴史と関心事についても知っていた。また、彼らの馬の血統を熟知し、この世の不思議と稀有なものにも通じていた。そのため、彼と会話を交わす人は、他の誰からも聞いたことがないようなことの知識を得ることが出来た。

彼の思いやり深さは、われわれの仲間の一人に、彼の病氣やその治療法、彼の食事や飲み物、そして病氣の状態の変化について尋ねるほどであった。

彼の集まりにおいては、彼は発言に礼儀正しさを求めた。彼の御前では、誰かについては良いこと以外は語られず、彼の耳が気分を害さないようにした。彼は、誰か人について聞くときは良いこと意外は聞くことを好まなかった。彼の舌はよく統御されていたので、私は決して彼が罵りを好むのを見たことがなかった。また、彼の筆も統御されていたので、彼は決してムスリムを害することを書かなかった。

彼は約束の履行に厳密であった。一人の孤児が彼の前に連れてこられたときは常に、その孤児の両親にアッラーのお恵みあれ、と言っていた。そして彼の心を慰め、父親が得ていた俸給をその孤児に与えていた。もしも、彼の縁者の中で、年上でその孤児が頼ることが出来る信頼できる人がいるならば、その孤児をその人にゆだねることが出来る。もしそうでないならば、彼の父の俸給からその孤児が必要とする十分なものを彼に残し、その孤児の教育と養育の面倒をみってくれる者に彼を引き渡したであろう。

サラディンは、老人に対しては深い同情を示し、彼に贈り物を与え、寛大にふるまうことなしに彼に会うことはなかった。このような彼の特質は、変わることなく、アッラーの慈悲の座、アッラーのお恵みの住まいに彼が召されるまで続いた。

これは彼の特質の稀有のものと高貴な特質のほんの一部であった。私はそれが冗長になり、退屈になることを恐れ

て簡潔にしたのである。私は、私が目にしたもの以外は記述しなかった。それに加えて、信頼できる筋から得た情報と私が吟味したものだけしか記述しなかった。これは、私が彼に仕えていた間に目にしたものの一部である。長い間彼に従ってきた者たち、彼への奉仕が古くからであった者たちの中で私以外の者が彼について語ったものはごくわずかであった。しかしながら、彼の特質と特異性の壮大さを証明するためには、この量は聡明な人には十分であろう。この第一部が完成されるにあたって、今この本の第二部を開始しよう。ここでは、サラデインの運命の移ろい、彼の戦いとその勝利について年代順に取り扱う。アッラーが彼の魂を清め、サラデインの墓をアッラーのお恵みの光で覆いますように。

第二部

年代順に取り扱うサラデインの運命の変遷、彼の戦いとその勝利の詳述について。アッラーが彼の魂を清め、サラデインの墓をアッラーのお恵みの光で覆いますように。

彼の叔父アサド・アッデインに随伴した彼のエジプトへの最初の遠征の記述

その理由は、デイルガーム Dirgham⁽¹⁵⁾と呼ばれた男が、エジプト人の宰相であったシャーワル Shawar⁽¹⁶⁾に対して反乱を起こしたためであった。彼はその職務とその地位を望んでいた。シャーワルはデイルガームと対決するために大軍を結集したが、デイルガームを打ち負かすことが出来なかった。デイルガームはシャーワルをカイロから追放し、シャーワルの息子を殺し、カイロを占領した。そして彼はワズイル職を手に入れた。

もし誰かが職位の持ち主を圧倒し、その職位の持ち主が相手を退けることが出来ない場合は、人々は彼の無力を認識し、勝利者に従い、彼をその職位に任じ、彼に権力を与えるのがエジプト人の習慣であった。というのは、彼らの

全権力はワズィールの軍隊によつて現れ、その称号はスルターンであつた。彼らは事を調べようとはせず、彼らの支配が確立したときからの目的と方式に従つた。

シャーワルが打ち負かされ、カイロから追放されたとき、彼は敵と戦うために、ヌール・アッディン・ブン・ザンキーの助けを求めてシリアに向かつて進んだ。ヌール・アッディンは、助けを求めてやつてきた者の権利を満たすために、アサド・アッディン・シールクーフにエジプトに向けて進軍することを命じた。そしてエジプトの国土の調査とその状態を突き止めることも命じた。それは、五五八年（一一六三年）のことであつた。アサド・アッディン・シールクーフは準備をして、エジプトに向けて進んだ。その際、シールクーフは、そのことに乗り気がしなかつたサラディン―彼にアッラーのお恵みあれ―を伴つた。シールクーフは、サラディンを必要とし、彼の軍隊の指揮官と助言者に任じた。彼らは、シャーワルを伴つて出発し、五五八年ジュマーダー・アルアーヒラ月二日（一一六三年五月八日）にエジプトに到着した。

彼らのエジプトへの到着は、大騒ぎを引き起こし、エジプトの人々に恐怖を起こさせた。シャーワルは彼のライバルに勝利した。シールクーフはシャーワルを元の職と地位に復帰させた。そして彼の支配と権力を確立させた。また、彼はエジプトの国土を調査してその状態を突き止めていた。シールクーフは、エジプトを手に入れたという野心を自らの心に植え付けてシリアに戻つた。というのは、彼はエジプトが（有能な）男のいない国であることを知り、そして国の支配が単に欺瞞と杜撰によつて行われていることを知つたからである。

彼は、エジプトからシリアへの帰還を上記の年のズー・アルヒッジャ月七日（一一月六日）に開始した。彼は、サラディンの助言と意見なしには何事も決定しなかつた。というのも、吉兆の兆しとしっかりした考えが、彼のあらゆる行動と勝利との結び付きが彼に現れたからである。シールクーフは、シリアに留まり策を巡らし、どのようにエジプトに戻ろうかと自らに語りながら、またその方法をアーデル・ヌール・アッディン―アッラーのお恵みが彼にあれ―と五六二年（一一六六―六七年）まで策定しながら考へていた。

彼の二回目のエジプト遠征とその理由の記述
それはバーバインの戦い⁽¹⁷⁾として知られている

アサド・アッディーン（・シールクーフ）は、シャーワルの耳に届くまで、この計画を人々に語り続けた。シャーワルはこの国がトルコ人の手に落ちるのではないかと恐れた。彼は、アサド・アッディーンがこの国を手に入れる野望を抱いていたこと、そしてその攻撃が避けられないことを理解した。それゆえ、シャーワルはフランクたちと書簡を交換し、彼らがエジプトに進軍して彼の支配を保つこと、そしてそこで彼が地位をしつかりと固めるために、彼の敵を駆逐して彼を助けることに同意した。このことは、アサド・アッディーンとアーデル・ヌール・アッディーンの耳に届いた。彼らは、異教徒たちがエジプト全土を支配することになるのではないかとひどく恐れた。そのため、アサド・アッディーンは準備をした。ヌール・アッディーンは彼と共に軍隊を派遣した。ヌール・アッディーンは、スルターン（サラディン）にアサド・アッディーンと共に進軍することを強いた。だが、スルターン―彼にアッラーのお恵みあれ―はそのことに気が進まなかつたのである。

彼らは、五六二年ラビーウ第一月（一一六六年―二月―一六七年一月）の間に出發し、エジプトへの到着は、フランクたちのエジプトへの到着と同時にあった。

シャーワルは、フランクとエジプト人全体と共にアサド・アッディーンに対抗することに同意した。彼らの間で多くの戦闘、すさまじい戦いが行われ、フランクたちはエジプトから退却した。アサド・アッディーンも退却した。フランクたちの退却の理由は、ヌール・アッディーンがフランクの土地に軍隊を派遣し、ムナイティラを占領したからであった。そのことを知ったフランクたちは彼らの土地のことを恐れ、退却していった。

アサド・アッディーンの退却の理由は、フランク軍とエジプト人の同盟による彼の軍隊の弱さのためであり、激しさに耐えられず、恐ろしいものを目にしたからであった。それでも、フランクが全軍をエジプトから退却するという

合意が結ばれるまでは、彼は退却しなかった。アサド・アッディーンは、その年の残余にシリアに帰還した。フランスがエジプトを取り戻すであろうという恐怖が強まるなか、彼はエジプトを勝ち取りたいという強い野望に結び付けられていた。彼らは、彼が以前探索していたようにエジプトを探索し、彼がエジプトについて知ったのと同じ方法で彼らもエジプトを知り得たのである。そのため、彼はしぶしぶ心に不安を抱えたままシリアに留まっていた。しかし、運命は、彼がまったく気づくことなく、それ以外に定められていたものに向かって彼を導くのである。

五六二年ラジャブ月（一一六七四年四月―五月）に、アサド・アッディーンの出発の後に、ヌール・アッディーンはムナイティラ⁽¹⁸⁾の城砦を占領し、付属するアカーフの城砦を破壊した。

この年のラマダーン月にヌール・アッディーンは、彼の兄弟クトゥブ・アッディーンとザイン・アッディーン―彼ら二人にアッラーのお恵みを―を遠征のためにハマーに集めた。彼らはフランスの土地に進軍し、その年のシャッワール月（一一六七七年七月―八月）にフーニーンを破壊した。

その年のズー・アルカーダ月（八月―九月）にアサド・アッディーンはエジプトから帰還した。同月、カラー・アルスラーンはディヤール・バクルで死去した。

彼らの三度目のエジプトへの帰還と彼らがエジプトを支配したこととの記述

五六四年（一一六八―六九年）に起こったことの推移

その理由は次のことであつた。フランス人たち―アッラーが彼らを見放しますように―は、彼らの歩兵と彼らの馬を集結させエジプトに向かつて進軍した。彼らはエジプト支配の野望から、エジプト人とアサド・アッディーンとの間で結んだ和約のあらゆる条項を破棄していた。その知らせがヌール・アッディーンとアサド・アッディーンのもとに届いたとき、忍耐が彼ら二人を許さず、彼ら二人は急いでエジプトへ軍隊を派遣した。

ヌール・アッディーンといえは、彼は資金と人員を準備したが、彼自身はフランクが彼の土地に攻め込んでくることを恐れて出発していかなかった。というのは、ザイン・アッディーン・アリー・ブン・バクタキーン―彼にアッラーのお恵みあれ―の死によって、彼の注意がモスルに向けられていたからである。彼は、五六三年ズー・アルヒツジャ月（一一六八年九月―一〇月）に死亡した。そして彼が所有していたすべての城砦は、イルビルを除いて、クトゥブ・アッディン・アターベクに引き渡された。そのすべては、彼がアターベク・ザンキー―彼にアッラーのお恵みあれ―から得ていた。この理由に触発されて、ヌール・アッディーンは、この地域に野心を広げ、軍隊を派遣した。

アサド・アッディーンに関していえは、彼自身で資金、彼の家計の人々、彼に従う者たちで準備を整えていた。かつてスルターン―彼の精神にアッラーの賞賛あれ―が私に言ったことがある。「この遠征でエジプトに出発していった者のなかで、私は最も望まれていなかった者の一人である。私が私の叔父（アサド・アッディーン）と共にエジプトに出発していったのは私の選択ではなかったのだ」と。これは、崇高な神の御言葉の意味である。

一体、汝らが自分では嫌だと思ふことでも案外身の爲めになることも知れないし、自分では好きでも、かえって害になることもあるもの。⁽¹⁹⁾

シャーワルは、フランク軍がその目的（すでに記した）をもつてエジプトに向かつて進んで行ったことを知り、アサド・アッディーンに助けと支援を求める使節を送った。そのためアサド・アッディーンは急いで出発していった。彼のカイロへの到着は、五六四年ラビーウ・アルアッワル月（一一六八年十二月）の間であった。

この年、五六四年ムハッラム月（一一六八年一〇月）にヌール・アッディーンは、ジャウバルの城砦をその所有者であったイブン・マリークから、彼を捕らえた後にサルージュ、バーブ・ブザーア、アルマル―ハと引き換えに購入して手に入れた。

同月、ヤールーキーヤ⁽²⁰⁾というニスバをもつヤールークが死去した。

フランク軍は、アサド・アッディーンが、彼とエジプト人との間での場合に基づいてエジプトに到着したことを知ると、来た道に戻って退却していった。アサド・アッディーンはそこに留まった。シャーワルはしばしば彼のもとを訪れた。シャーワルは、彼らが出費したこの遠征額に十分見合うだけの金額の支払いを彼らと約束していた。しかし、彼は彼らに何も手渡していなかった。アサド・アッディーンは、彼の鉤爪はしっかりとエジプトをつかんでいた。というのは、彼らは、もしフランクが好機を見出したならば、この国を手に入れるであろうということ、またフランクはくり返しこの国にやってきたがいずれも無益であったということを知っていたからである。またシャーワルは時には彼らと遊び、時にはフランクと遊んだこと、この国の支配者たちはビドア（宗教的逸脱）の信仰に従う者たちであることを知っていた。また彼らは、シャーワルを生き延びさせる限り、この国を手に入れる方法はないということを知った。そのため彼らは、もしシャーワルが彼らのもとを訪れたならば、彼を逮捕すること話がまとまった。彼らは、アサド・アッディーン抜きにしてもしばしばシャーワルのもとを訪ねていた。またシャーワルは、アサド・アッディーンに会うために時には彼のもとを訪ねていた。

シャーワルは、彼らの宰相の流儀にしたがって、太鼓、トランペット、旗で飾り乗馬していた。それゆえ、スルターン（サラディン）その人以外に、供の者たちで囲まれたシャーワルを逮捕する勇敢な人はいなかった。シャーワルが彼に会うために乗馬して彼らに近づいてきたときに、スルターンは彼の側に近づき、彼の襟をつかみ、彼の軍隊にシャーワルの従者たちをとらえるように命じた。すると彼らは逃げ出し、軍隊は彼らを略奪した。シャーワルは逮捕され、離れた天幕に移された。

直ちにエジプト人たちから宮廷宦官の手によって、命令書が彼に届けられた。そこには、彼らから支配を勝ち取った者の地位を確かなものとするために彼らの慣習と彼らの宰相たちの事柄にしたがって、彼の首が必要であると記されていた。シャーワルの首は刎ねられ、彼らに届けられた。

宰相の服がアサド・アッディーンに届けられた。彼はそれを身に付け、宰相用に用意された宮殿に入った。それは五六四年ラビーウ・アルアーヒル月一七日（一一六九年一月一日）のことであった。彼は究極の権威を与えられた

のである。スルターン―彼にアッラーのお恵みあれ―は、彼の能力、知識、判断と統治の良さのため、上記の年のジュマード・アルアーヒラ月二二日（一一六九年三月二二日）までに通常の事柄を取り扱い、それを決定する任務を任された。

注

- (1) シャイヤール校訂本二八頁の冒頭から。
- (2) コーラン第三章 イムラーン一家 一三四節、井筒俊彦訳、『井筒俊彦著作集』第七巻、参照。以下同じ。
- (3) 泉の牧草地という意味。シリアの海岸にある町。Yaqūbi, *Mu'jam al-Buldān*, vol. 5, p. 101.
- (4) Abū al-Faḥ Sulaymān al-Rāzī はシャーフイー派の法学者で、イバーダを専門とし、多数の著作を著した。Ibn Khalikān, *Wafayāt*, II, pp. 397-99.
- (5) Al-kharakāt はペルシア語起源の言葉。テントの一種で、材木で組み立てられ、丸天井が結び付けられている。周囲も天井もフェルトで覆われている。
- (6) コーラン第六八章 筆 四節
- (7) コーラン九章 改悛 一一一節
- (8) Sawānat はペルシア語の sāyānān に由来する。テントを意味した。
- (9) マーリク・ブン・アナスのハディースに見受けられる。Mālik ibn Anas, *al-Muwattaʿ*, trans. Aishe A. Bewley, London and New York, 1989, p. 382.
- (10) al-Amq, 本来の意味は、くぼ地である。アンティオキアの北東の平原。E² vol. I, pp. 109-11.
- (11) ムヒー・アッディーン・ブン・ザキリー（一一五五／五六―一二〇一／〇二）は、ダマスクス生まれのシャーフイー派の法学者。第三代カリフ・ウスマーンの子孫でクライシユ族に属する。特にフトバや書簡の起草に優れていた。ダマスクスで裁判官を務めていたところをカーディー・アルファーディルによって見出された。サラディンのもとで高い地位を得て、大きな影響力を持った。サラディンのイェルサレム奪回後、アクサー・モスクで執り行われた最初の金曜日のフトバを行う名誉を与えられた。松田俊道『サラディン』（世界史リブレット〇二四）山川出版社、二〇一五年、参照。
- (12) al-yazakiyya は、ペルシア語由来の言葉で、yazak は哨兵、斥候兵を意味する。
- (13) イブン・アルアシルは、以下のように記述している。ケラクの領主レイナルドは、フランクの中で、最も名高い邪悪な者の一人であり、ムスリムに対して最も敵対的であり、最も危険な人物であった。それに気づいたサラディンは何度も封鎖によって彼を標的にし、機を見て彼の領土を襲撃した。隊商の捕縛に関しても同様のことが記されている。

⁂。Ibn al-Athir, *al-Kāmil fi-l-Ta'rikh*, trans. D.S.Richards, Ashgate, 2007, part 2, pp. 316-17.

- (14) この部分については、イブン・アル・アシールの同様の記述がある。Ibn al-Athir, *al-Kāmil fi-l-Ta'rikh*, trans. D.S.Richards, Ashgate, 2007, part 2, pp. 318-19.

- (15) デイルガームは、ファアティマ朝のアミールで、この王朝の最後のカリフ・アッデイドの宰相であった。ライバルのシャーワルと争い、宰相の職を奪われる。しかし、彼はその職位回復を望み、シャーワルに対して反乱を起こした。Ef, vol.2, pp. 317-19.

- (16) シャーワル（一六九）は、上エジプト総督に任じられた後、反乱を起こしてカイロに進軍し、一一六三年に宰相に就任した。まもなく政敵のデイルガームによって職を追われ、ダマスクスに落ち延び、ヌール・アッデインに支援を求めた。ヌール・アッデインはシリア軍をエジプトに派遣し、シャーワルはファアティマ朝の宰相に復帰した。Ibn Khalikān, *Wafayāt al-A'yān*, vol.2, Beirut, 1977, pp. 439-443.

- (17) バーバインは、エジプトの al-Ashmunain の近くに位置する村。ヌール・アッデインは、エジプト支配をもくろんで、一一六七年一月に二度目の遠征をシールクーフに命じた。ファアティマ朝の宰相のシャーワルはヌール・アッデインのこの動きを知り、イェルサレム王アモリー一世と協約を結んだ。それはフランク軍がファアティマ朝を

『サラディンの稀有で至高の書』—その3—(松田)

支援するといふものであった。シールクーフはエジプトに進軍し、Aṣṭūh をめざした。その近くでナイルを渡り西岸

のギザに陣を張り準備を整えた。シャーワルとフランク軍はバーバインと呼ばれる場所に到着した。アサド・アッデインはスパイを敵方に送り、情報を収集した。すると部隊の数の少なさなどから壊滅の恐れがあり、シリアへの退却の声も上がった。その時、ブズグーシユと呼ばれる一人の勇敢なマムルークが、「恐れるものは誰でも殺されるか捕らえられる。そういう者は家にいる妻のもとへ戻せ。……お前はムスリムのお金を受け取り、彼らの敵から逃亡し、エジプトのような土地を異教徒に渡すのか」と言った。それにこたえて、アサド・アッデインは、「これは正しい考えた。私はそれを実行しよう」と言った。サラ

- (18) ムナイティラは、シリアのタラーブルスの近くの砦。Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, vol.5, Beirut, 1979, p. 217.
- (19) コーラン第二章 牝牛、二一六節
- (20) ヤールキーヤは、アレppoの外に位置する大きな地区。

支援するといふものであった。シールクーフはエジプトに進軍し、Aṣṭūh をめざした。その近くでナイルを渡り西岸のギザに陣を張り準備を整えた。シャーワルとフランク軍はバーバインと呼ばれる場所に到着した。アサド・アッデインはスパイを敵方に送り、情報を収集した。すると部隊の数の少なさなどから壊滅の恐れがあり、シリアへの退却の声も上がった。その時、ブズグーシユと呼ばれる一人の勇敢なマムルークが、「恐れるものは誰でも殺されるか捕らえられる。そういう者は家にいる妻のもとへ戻せ。……お前はムスリムのお金を受け取り、彼らの敵から逃亡し、エジプトのような土地を異教徒に渡すのか」と言った。それにこたえて、アサド・アッデインは、「これは正しい考えた。私はそれを実行しよう」と言った。サラディンも同じことを言い、満場一致の決定は戦うことであつた。カイロの南およそ一〇キロメートルのバーバインで両者の戦闘が行われ、アサド・アッデインは完全な勝利を収め、エジプトを手に入れることができた。Ibn al-Athir, *al-Kāmil fi-l-Ta'rikh*, trans. D.S.Richards, Ashgate, 2007, part 2, pp. 163-64.